すべ と しるべ

2020 #01 Murata Chihiro_while it goes / #02 Tomoeda Nozomi_afterglow of vestige　Gallery PARC

正木裕介（ギャラリー・パルク ディレクター）
Masaki Yusuke (Director, Gallery PARC)

すべ と しるべ

Sube / Shirube（Way and Mark）

『すべ と しるべ』は、展覧会という形式を表現と社会の接点として捉え、現在とこれからの社会状況の中でより有効に起動させるための新たな方法と可能性を模索するプロジェクトです。

表現（すべ）を社会に向けてひらく標（しるべ）である「展覧会」は、鑑賞者が作品と空間・時間をともにする「体験」の場であるといえます。しかし、それゆえに展覧会という形式は、これからの社会状況においてアクセシビリティそのものを低下させる側面もあります。また、デジタルによるオンライン展示などは、まだこの体験の代替機能としては不十分であるとも考えます。だからこそ、これからの「展覧会=体験」の創出には、これまでの方法とともに、異なる思考・方法を採り入れた変化が必要ではないかと考えます。

本プロジェクトでは、展覧会を「つくる・ひらく・のこす」の関係性から検証します。体験を直接の鑑賞に限定し、記録（写真やテキスト、映像など）をその補完物として残すのではなく、記録が新たな体験を「つくる」こと、そこに鑑賞を「ひらく」ことに重点を置き「のこす」ための方法（すべ）の開発を目的としています。

2020年、京都府南丹市八木町に残る築400 年を超える酒蔵「旧八木酒造」を会場に、むらたちひろ / 友枝望の2名のアーティストが滞在・制作し、それぞれ3日間だけの展示公開を行ないました。これをもとに制作した写真・テキストによる記録と、展示をもとに制作した映像を公開します。

本冊子はテキストによる記録を纏めたものとして、むらたちひろ、友枝望によるテキストとともに、実際に展示を鑑賞いただいた勝冶真美（京都芸術センタープログラムディレクター）、はがみちこ（アート・メディエーター）、平田剛志（美術批評）の3名のレビューを掲載しています。また、記録写真はそれぞれポスターサイズの紙面にまとめています。オンラインで公開している映像は、パフォーマーに今村達紀（振付家、ダンサー）、映像作家として麦生田兵吾（写真家）に参加いただき、正木裕介（ギャラリー・パルク ディレクター）のディレクションにより制作したもので、展示や作品・作家の意図を解釈しながら、2名のアーティストによる表現からは独立したものとして制作しています。

テキスト・写真・映像はそれぞれの展示を中心に、相互に補完しあうよう意図していますが、あえて強い結びつけは避けています。「鑑賞者」のみなさまには展示空間を訪れた時と同様に、見えるものを手がかりに、見えないものを想像や発見によって結びつける、鑑賞体験が可能となっています。

In the form of an exhibition, “Sube / Shirube (Way and Mark)” is seen as the point of contact between expression and society and is a project to explore new possibilities in order to activate it more effectively in current and future social situations.

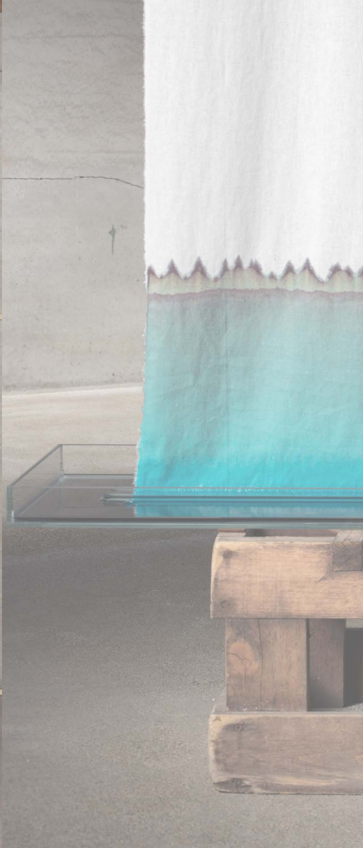
An "exhibition" is a mark that opens up expression (method) to society and it can be said to be a place where the viewer shares space and time with the work (experience). However, the form of the exhibition therefore has the aspect of reducing accessibility itself in the future social situation. I also think that digital online exhibitions, etc. are not yet sufficient as an alternative to this experience. That is why I think that in order to create "exhibition = experience" from now on, it is necessary for exhibition to change by adopting different thinking and methods in addition to methods thus far.

In this project the exhibition from the relationship of "creating, opening and recording” will be validated. We are aiming to develop a method for the purpose of limiting the experience to direct viewing and not recorded media (photos, texts, videos, etc.) as a complement but focusing on them "creating" new experiences and "opening" viewing there.

In 2020, two artists, Murata Chihiro and Tomoeda Nozomi, resided and created in the “former Yagi Sake Brewery”, a sake brewery over 400 years old which remains in the town of Yagi in Nantan City, Kyoto Prefecture. It was the venue for their exhibitions, each open to the public for only three days. We will release the video produced based on the exhibitions, photo and text records for them.

This booklet is a compilation of textual records and along with texts by Murata Chihiro and Tomoeda Nozomi, we have published the reviews of Katsuya Mami (program director, Kyoto Art Center), Haga Michiko (art mediator) and Hirata Takeshi (art critic), all three of whom actually saw the exhibitions. Each documented photo is arranged on a poster-sized paper surface. The video published online was produced with Imamura Tatsunori (choreographer, dancer) as a performer, Mugyuda Hyogo (photographer) as a videographer and under the direction of Masaki Yusuke (director, Gallery PARC); while interpreting the intentions of the exhibitions, works and artists, it is produced as independent from the expressions by the two artists.

The texts, photographs, and videos, centering on each exhibition, are intended to complement each other, but I dare to avoid strong ties. Just like when visiting the exhibition space, viewers can enjoy imagining and discovering invisible things through visible things as clues.



すべ と しるべ 2020 #01
Sube / Shirube 2020 #01

# 時の容
while it goes

むらた ちひろ
Murata Chihiro

2020年 10月24日［土］・25日［日］・26日［月］　12〜17時
October 24 (Sat), 25 (Sun), 26 (Mon), 2020, 12:00 p.m - 5:00 p.m

オーエヤマ・アートサイト（旧・八木酒造）
O-eyama Art Site

主催・制作 Organize / Produce
ギャラリー・パルク Gallery PARC

協力 Cooperation
江島 和臣 Eshima Kazuomi ／ 武田 真彦 Takeda Masahiko
オーエヤマ・アートサイト O-eyama Art Site
今村 達紀 Imamura Tatsunori

展示作品 Works

- 時の容
  2020　綿布、染料、水
  toki no yo（“yo” of time）　2020　Cotton cloth, Dye, Water
- beyond : Aug.- Oct. 2020, at Yagi / Kyoto
  2020　綿布、染料、水
  beyond : Aug.- Oct. 2020, at Yagi / Kyoto　2020　Cotton cloth, Dye, Water
- 雫 : Aug.- Oct. 2020, at Yagi / Kyoto
  2020　綿布、染料、水、デジタル捺染応用技法
  shizuku（drop）*: Aug.- Oct. 2020, at Yagi / Kyoto*　2020　Cotton cloth, Dye, Water
- planet 04C 05 '20.9.28. PM 12:21 - PM 6：01（映像のみ）
  2020　綿布、染料、HD VIDEO（6：54）
  planet 04C 05 '20.9.28. PM 12:21 - PM 6:01（Video part only）　2020　Cotton cloth, Dye, HD VIDEO（06:54）
- planet 04C 06 '20.9.28. PM 1:06 - PM 6：08（映像のみ）
  2020　綿布、染料、HD VIDEO（4：01）
  planet 04C 06 '20.9.28. PM 1:06 - PM 6:08（Video part only）　2020　Cotton cloth, Dye, HD VIDEO（04:01）

特別映像（会場限定公開） Special Video（Limited screening at the exhibition）
『すべ としるべ 2020 #01［時の容］ Ver.1』
2020　HD VIDEO（7：10）
監督：正木 裕介 ／ 撮影・編集：麥生田 兵吾 ／ パフォーマンス：今村 達紀
“Sube / Shirube 2020 #01［while it goes］Ver.1”
Director：Masaki Yusuke, Film：Mugyuda Hyogo, Performer：Imamura Tatsunori

　むらたちひろは染織を「時をうつし見るための すべ」と捉え、「染める／染まる」という行為・現象に着目した作品制作に取り組んでいます。本展示でむらたは「水」を媒介とする染織の行為と現象に、「時（記憶）」をうつし見ようとします。その不可視の様相は色によって可視化されることで、私たちに様々な発見を促します。

　端だけをあらかじめ濃紺に染めた布を吊り下げ、水に浸すことで再び染料が浸透し、単色に内包されていた豊かな色彩が現れる《 **時の容** 》。同様の手法によって舟形に折った布が染まっていく様子を撮影した映像作品《 **planet** 》。酒蔵に残されたガラス窓を什器に、デジタル捺染によりプリントした図像が水によって溶けて滲み、色へ、無へと還元されていく作品《 **雫 : Aug.- Oct. 2020, at Yagi / Kyoto** 》。コンクリート造りの空間をアトリエとした滞在制作による《 **beyond** 》シリーズ。むらたは時が止まったようにも感じる旧酒造において、そこに満ちる見えない時を、「現れ・動き・消える」染色の様子にうつし見せました。

　加えて、むらたは空間を満たす要素として「音」に着目し、サウンドアーティストである江島 和臣・武田 真彦に協力を依頼し、空間にまつわる音という不可視へのアクセスを試みています。この試みは本展示ではまだ明確なカタチを伴わなかったが、これからに向けたむらたの眼差しとして、その染色に現れてくるかもしれません。

正木 裕介（本展企画）

Murata Chihiro sees dyeing and textiles as “a method to see time” and is working on creating works focused on the act / phenomenon of “dyeing / to be dyed”. In this exhibition Murata is trying to look at “time (memory)” by the act and phenomenon of dyeing mediated by "water". The invisible aspect is visualized by color which encourages us to make various discoveries.

“toki no yo （“yo” of time）”, a work in which a hanging cloth with only the edges dyed in dark blue in advance is immersed in water, making the dye permeate again and the rich colors contained in a single color to appear. ***“planet”***, a video work in which a boat-shaped cloth is dyed by the same method. ***“shizuku*** (drop) ***: Aug.- Oct. 2020, at Yagi / Kyoto”***, a work in which an image printed digitally dissolves in water, bleeds, and is reduced to color and nothing using a glass window left in the sake brewery as a utensil. ***“beyond”*** series, which are made at a concrete space as a studio. In an old sake brewery where it feels like time has stopped, Murata showed time there, invisible yet plenty, through " appearing, moving, and disappearing", the states of dyeing.

In addition, Murata focuses on "sound" as an invisible element that fills the space and requested the cooperation of sound artists Eshima Kazuomi and Takeda Masahiko in trying to access the invisible sound of space. This attempt did not yet have a clear shape in this exhibition but it may appear in the dyeing of Murata whose gaze is turned toward the future.

Masaki Yusuke(Curator)

勝冶真美（京都芸術センタープログラムディレクター）
Katsuya Mami (Program Director, Kyoto Art Center)

稜線の向こうを見る

Looking Beyond the Ridge

この数年、むらたちひろの作品を見る機会があり、その淡々とした仕事ぶりと清新な色彩感覚は変はそのままに、この数年はより「染」を意識した作品を展開しており、染めるという行為と染色のもたらす現象に向き合っている様子が伺えていた。

この展覧会「時の容：while it goes」はギャラリー・パルクによる展示企画『すべとしるべ』のひとつとして実施された。京都市に隣接し、大堰川をはじめ雄大な自然が身近に迫る南丹市八木に残る旧「八木酒造」に滞在しながら制作を行なったという。またコロナ禍への意識から、展示だけではなく、映像による記録公開を企画意図に組み込むことによって、展覧会における記録と記憶の問題を問いかけている。そして、この企画意図は参加作家それぞれにも、そこへの思考や想像を向けさせる影響を与えていたと思われ、むらたも染色という技法を用いて「時」を捉えることに本展の主眼を置いている。

会場１階を奥に進んだ左手、光の多く入る空間には天井から大きな布が吊るされている。下部だけが初めから染められた布の下端は、水の張られた浅い水槽にわずかに浸かっており、毛細管現象原理で布が水を吸うことで、定着したと思われていた染料が少しずつ分離し、上へと吸い上げられる。これにより、染料は多様な色を表出させながら、無地の布に染めによる境界線を見せていく。自然現象から生み出されるその微妙な境界線は遠くに連なる山々の稜線のように見え、布の上部の生成りの余白は朝焼けの空のようにも、染料の滲みやグラデーションは朝霜や霧のようにも見えてくる。

この作品《 **時の容** 》が内包していた時間は、振付家・ダンサーの今村達紀が本作品に介入するようにパフォーマンスを行なう様子を記録した映像『すべとしるべ 2020 #01［時の容］Ver.1』として会場内で公開されている。水がゆっくりと注ぎ足されていくシーンは厳かな儀式のようで、ここから起こる変化への予感が満ちている。

会場２階にある木造の空間には、いくつもの舟形に折られた布がガラスの上に置かれた《 **雫：Aug.-Oct. 2020, at Yagi / Kyoto** 》がある。写真を布にプリントして舟形に折ったものに、水を挿すことで染料は溶け出し、布には滲みだけが残っている。イメージが溶けたあとの滲みを引き受け佇む舟は、歴史を纏ったままこれからもここに在り続けるこの建物の存在そのものを隠喩しているようにも思えた。

２階のコンクリート造りの空間はむらたによる制作場所として設えられていて、大きな布をキャンバスにした《 **beyond: Aug.-Oct. 2020, at Yagi / Kyoto** 》シリーズを会期中に公開制作している。むらたが八木滞在中に近隣をハイキングして写真やスケッチした植物や風景の印象から決めた色により、幅広の刷毛によるストロークと、染料が乾く前に重なりあうことで起こる滲みが画面を構成している。いくつかの微妙なグラデーションの染料の中から一つを選び、少し考えた後に大胆に線を引いていく姿には迷いがない。ストロークの重なるところは色（水）が押されたり引き合ったりしながらやがて落ち着く。滲みは自然現象なのだから、思わぬ場所に染みこんだり濁った色に沈んだりしてしまいそうなものなのに、しばらく見ていても不思議に、落ち着くべきところに落ち着くようだ。冷静なむらたの様子からもある程度こうなるだろうことは予測できているに違いなく、それは制作場の一角に設えられたいくつものテストを重ねたであろうサンプル類を見ても分かる。そして、この様子を見ながら本展のタイトルである「時の容」に意識を戻してみると、むらたの見る「時」は未来からの参照点としての「いまここ」であると同時に「そしてこれから」でもあるのだと思った。

本展は創業400年になる造り酒屋での滞在制作と展示であり、こういった特殊な設定を与えられると、多くのアーティストがその場や地域の歴史等をリサーチして自分の創作とを結ぶ接点を探そうとするのではないだろうか。もちろん、むらたもこのサイトスペシフィックな状況において経験や知識として得たものは多くあっただろうが、いわゆるリサーチベースドな作家と違い、彼女は直接的に酒造や地域の過去を創作の源泉にしない。むしろ彼女の視線は徹底して予測・予知・予感といった未来を指向している。

「止まっているようで、動いている」というむらたの「時」のイメージ【註1】は、一瞬の連続としての時間を染色の現象に見出すことでつくられている。いまここからその先を見ようとすること、キャンバスに現れるその希望を湛えた実直な眼差しに気づくとき、「時をうつし見るためのすべ（術）」【註2】としてのむらたの作品はより一層の必然性をもってわたしたちの前に現れる。

【註1】【註2】会場配布資料より

In the last few years, I have had the opportunity to see the works of Murata Chihiro, her straightforward work manner and her fresh sense of color remains strange, but we can speculate that she has been developing works that are more conscious of “dyeing” , facing dye and the phenomenon that it brings.

This exhibition, “while it goes”, was held as one of the exhibition projects, “Sube / Shirube (Way and Mark)”, by Gallery PARC. It is said that the production was carried out while staying at the former "Yagi Sake Brewery" which remains in Yagi, Nantan City, which is adjacent to Kyoto City and where magnificent nature such as Oigawa river approaches. Also from the consciousness of coronavirus pandemic, not just display but by incorporating the release of video records into the project intention, we are addressing the issue of recording and memory in the exhibition. And this

project intention is thought to also give each participating artist influence to direct thoughts and imagination to it and Murata using the technique of dyeing to capture "time" is the main focus of this exhibition.

A large cloth is hung from the ceiling in a brightly lit space on the left-hand side of the first floor of the venue. The lower end of the cloth, dyed only at the bottom, is slightly immersed in a shallow aquarium and sucks water through the principle of capillary phenomenon, the settled dye gradually separating to be sucked up. By this while exposing dyes in a variety of colors, the boundary lines will be shown by the dyeing on plain cloth. The delicate boundaries created by natural phenomena look like the ridges of distant mountains, the unbleached margin at the top of the cloth like the sky at sunrise and the bleeding and gradation of the dye like morning frost and fog.

The time included in this work, ***"toki no yo*** ("yo" of time)***"*** , is a video recording the performance of choreographer, dancer, Imamura Tatsunori appearing to intervene in this work and is open to the public in the venue as a video, "Sube / Shirube 2020 #01 [while it goes] Ver.1". The scene where water is slowly added seems like a solemn ritual, and there is full of premonition for the change that will occur from here.

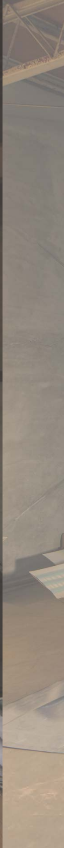
In the wooden space on the second floor of the venue is "***shizuku***（***drop***）***: Aug-Oct. 2020 at Yagi /Kyoto***", a number of boat-shaped cloths placed on glass. To a cloth printed with a photo and folded into a boat shape, water is added to dissolve the dye, leaving only bleeding on the cloth. The boat taking on the bleeding after the melting of the image seemed to be a metaphor for the very existence of this building which will continue here clad in history.

The concrete space on the second floor was set up as Murata' s studio for the "***beyond: Aug.-Oct. 2020, at Yagi / Kyoto***" series with in-session production using a large cloth as a canvas open to the public. Based on colors inspired by plants and landscapes that she photographed and sketched on her neighborhood hikes during her stay in Yagi, the screen is made up of wide-brushed strokes and the bleeding of overlapping dyes before drying. Choose one from several subtle gradation dyes, there is no hesitation in drawing a line boldly after thinking for a bit. Where the strokes overlap, the color (water) is pushed and pull against each other, eventually settling down. Because bleeding is a natural phenomenon it's likely to soak into an unexpected place or sink into a muddy color but oddly, even looking at it after a while, it seems to settle down where it should be. From the calm state in which Murata is, it must be possible to predict that this will happen to some extent as well as by looking at the samples that would have been tested many times in a corner of the production site. Then, while watching this state, when I look back on the title of this exhibition, "while it goes", I thought that the "time" that Murata sees is not only "here and now" as a reference point from the future but also "and from now on".

This exhibition is Artist-in-residence and show at a sake brewery that has been in business for 400 years and if given such special settings, perhaps many artists will research the history of the place or region and try to find a point of contact for their work. Of course, Murata would have gained a lot of experience and knowledge in this site-specific situation but unlike so-called research-based artists, she does not directly use sake brewing or the local past as a source for creation. Rather, her gaze is thoroughly aimed toward the future called estimation, prediction, and premonition.

The image of "time"[1] for Murata who says, "It seems to be stopped yet moving", is made by finding time as a series of moments in the phenomenon of dyeing. Trying to look beyond the here and now, when one notices the honest gaze filled with hope that appears on the canvas, Murata's work appears in front of us with even greater inevitability as "a way to look at time"[2].

【1】【2】 from the document distributed during the exhibition



2020年 8-10月 八木 / 京都

Aug.- Oct. 2020, at Yagi / Kyoto

むらたちひろ（染織作家）
Murata Chihiro (Artist)

酒造りに使われた水場や、簡単な大工仕事で作られた道具掛けなど、かつての工房としての佇まいが残っている「旧酒蔵」。ここに感じる「誰か」の気配に介入する行為として、自分もここで染めてみようと思った。

井戸水を汲んで染料を溶き、大きな布をいくつも染めた《 beyond : Aug.- Oct. 2020, at Yagi / Kyoto 》は、シリーズ作品の延長として取り組んだ。このシリーズは、「染め」によるストロークが即座ににじみ、遠ざかっていく感覚に、遠い過去の記憶や精神的な遠さを重ねて描いている。これまでは日々の出来事に影響を受けながら描いてきたが、今回は非日常の日々のなかで、「遠くを想うひととき」をつくりたいと考えた。

その頃には、既にマスクをしたり様々なことに制限をかけることが当たり前になっていて、初めて訪れた八木での何気ない風景がとても新鮮に見えたことも関係している。周辺を散策しながら「絵が描きたい」という想いが湧き出し、スケッチに描きとめた色を染めによって広げたいという欲求もあった。

染料が浸透していく時間、にじむ色が溶け合う時間。
私が扱う「染織」は時間と共に在る。

これまで会場での鑑賞を前提とした展覧会では、そんな染織が内包する「時間」を作品に定着させることを目指してきたが、このプロジェクトが映像での鑑賞をひとつの「すべ」として位置付けていたことから、それらを映像における時間軸の中に解放することで、そこに自身と鑑賞者にとっての新たな視点が開けるのではないかと考えた。

《 雫 : Aug.- Oct. 2020, at Yagi / Kyoto 》では、染料でプリントした図像が、水に濡れてにじみ、ゆらいでいく。

会場周辺を散策して撮影した写真をもとにした図像は、裏面に折り込んでいるため、はっきりと見ることはできない。会場で水を差すことで、色が表面に染み出すが、元の図像はそこには無く、「消えていく時」が流れはじめる。小さな “舟” が染まっていく様子を収めた映像作品《 planet 》と、会場公開前後の数日間にわたって広巾の生地が染まっていく《 時の容 》は、色の浸透によって「現れる時」の様相を見せる。

本展のタイトルでもある「時の容」。「容」には、容れ物であり何かの姿という意味と、寛容・受容の意味を込めている。
私にとって「時」は、日々の出来事や感情の揺らぎを、のみこんでくれる存在である。消し去るのではなく、これからの時間に続く糧として。

周辺は人通りも少なく、建物の中は一層静まりかえっていた。旧酒蔵で長い時間を過ごしているうち、「音」という存在にも興味をひかれるようになった。屋根に長居する鳥のさえずり、定期的に作動する機械音、町内放送や遠くの環境音。普段の制作ではあまり意識しなかったが、空間の要素として「音」についても触れてみたいと思うようになった。
そこでサウンドアーティスト「江島和臣 ／ 武田真彦」に協力を依頼し、私の滞在制作中に同空間で音を制作してもらう日を設けた。環境音や、その場で響かせる音を採取し、インタラクティブにサウンドを生成していく彼らの仕事は、酒蔵内の環境に介入する行為として、染色に取り組む私の試みと共通する部分があると考えた。しかし当日は予定外の工事によって、全ての音が支配されてしまった。今回の映像には残すことができなかったが、現場で収集された音をもとに、数十分間流れた彼らの音は、作品を含む空間全体になじむものだったと感じている。

An “old sake brewery” that retains the appearance of a former workshop, the water place used for sake brewing and tool racks made by simple carpentry, etc. As an act of intervening in the feel of "someone" here, I also decided to dye here.

“***beyond : Aug.- Oct. 2020, at Yagi / Kyoto***”, the work which is a number of large cloths dyed with dissolved dyes in natural well water, is an extension of a series. In this series the strokes of "dyeing" instantly bleed, and the feeling of receding is superimposed on the memories of the distant past and spiritual distance. I've drawn influenced by daily events until now but this time I thought that I want to create "a moment to think of far away" in my extraordinary days.

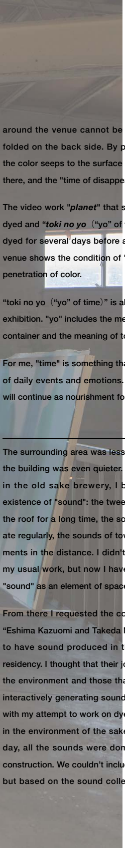
By that time, it had already become commonplace to wear masks and restrict various things, and it is also related to the fact that the unique scenery in Yagi looked very fresh when I visited for the first time. While strolling around the area, the desire of "I want to draw a picture" arose as well as a desire to spread the colors drawn in the sketch by dyeing.

The time for the dye to penetrate, the time for the bleeding colors to melt into each other.The "dyeing and textile" that I handle exists over time.

Until now, I have aimed to establish the “time” involved in dyeing and textile in my work for exhibitions where the premise is viewing at the venue but because this project has video being one “way” of viewing, I thought that it might open up a new perspective for myself and the viewers by releasing them in the timeline of the video.

With "***shizuku*（drop）*: Aug.- Oct. 2020, at Yagi / Kyoto***", the image printed with dye gets wet with water, bleeds and fluctuates.

The image based on the photographs taken while walking



around the venue cannot be seen clearly because it is folded on the back side. By pouring water at the venue, the color seeps to the surface but the original image is not there, and the "time of disappearance" begins to flow.

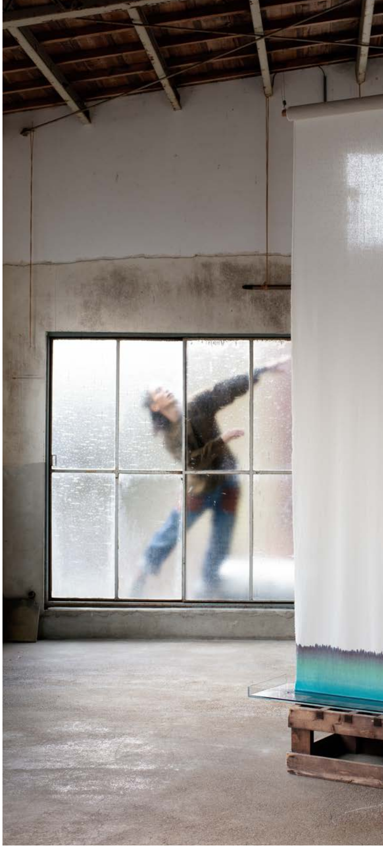
The video work "***planet***" that shows how a small "boat" is dyed and "***toki no yo***（"yo" of time）" where a wide cloth is dyed for several days before and after the opening of the venue shows the condition of "time of appearance" by the penetration of color.

"toki no yo（"yo" of time）" is also the Japanese title of this exhibition. "yo" includes the meaning of something that is a container and the meaning of tolerance and acceptance.

For me, "time" is something that swallows the fluctuations of daily events and emotions. Instead of being erased, it will continue as nourishment for the time to come.

The surrounding area was less crowded, and the inside of the building was even quieter. While spending a long time in the old sake brewery, I became interested in the existence of "sound": the tweet of birds that have lived on the roof for a long time, the sound of machines that operate regularly, the sounds of town broadcasts and environments in the distance. I didn't pay much attention to it in my usual work, but now I have come to want to touch on "sound" as an element of space.

From there I requested the cooperation of sound artists "Eshima Kazuomi and Takeda Masahiko" and set up a day to have sound produced in the same space during my residency. I thought that their job of collecting sounds from the environment and those that resonate on the spot and interactively generating sound had something in common with my attempt to work on dyeing as the act of intervening in the environment of the sake brewery. However, on that day, all the sounds were dominated by unplanned local construction. We couldn't include them in the video this time but based on the sound collected in the place, I felt that their sound, which flowed for tens of minutes, fit the entire space including the work.



すべ と しるべ 2020 #02
Sube / Shirube 2020 #02

残影の残光
afterglow of vestige

友枝 望
Tomoeda Nozomi

2020年 11月14日［土］・15日［日］・16日［月］ 12〜17時
November 14 (Sat), 15 (Sun), 16 (Mon), 2020, 12:00 p.m - 5:00 p.m

オーエヤマ・アートサイト（旧・八木酒造）
O-eyama Art Site

主催・制作 Organize / Produce

ギャラリー・パルク Gallery PARC

協力 Cooperation

米沢 直（タップダンス） Yonezawa Naoshi（Tap Dance） ／ 大堰川の釣り人 Oigawa River Angler ／ 黒田大地 Kuroda Daichi ／ JUJUスタッフの皆様 JUJU's stuff ／ 秋田家の皆様 Akita family

オーエヤマ・アートサイト O-eyama Art Site

今村 達紀 Imamura Tatsunori

展示作品 Works

- Ritual − Mt' ATAGO
  2020　火迺要慎の御札、HD VIDEO（24：47）
  2020　Charm for caution fire notes, HD VIDEO（24:47）
- Misalignment − gather Matsu-take mushrooms
  2020　家具、松茸の模造品、松の枯葉、シダ、写真、HD VIDEO（7：06）
  2020　Furniture, Imitation of matsutake mushroom, Fallen leaf of pine tree, Fern, Photograph, HD VIDEO（7:06）
- Misalignment − Ayu fishing
  2020　ハヤ、小魚、タニシ、小エビ、水藻、石、大堰川の水、井戸水、ポンプ
  2020　Minnow, Small fish, Pond snail, Small shrimp, Waterweed, Stone, Water from Oigawa river, Well water, Pump
- Misalignment − sericulture, Mulberry leaf-sake
  2020　しおれた桑の木、蚕が食べ残した桑の葉、蚕のフン、蚕、まゆ玉、ホワイトリカー、桑の葉、みりん、米麹、自作の桑酒、八木酒造の桑酒のラベル
  2020　Withered mulberry tree, Mulberry leaves eaten by silkworm, Dung of silkworm, Silkworm, Cocoon, White liquor, Mulberry leaf, Sweetened sake, Rice malt, Self-made mulberry sake, Mulberry sake label by YAGI Sake brewery
- afterglow of vestige − TAMBA SAKE BREWING SONGS
  2020　HD VIDEO（6：02）
  2020　HD VIDEO（6:02）
- afterglow of vestige − TAMBA YAGI
  2020　OHP シートにインクジェットプリント
  2020　Inkjet printed on OHP film
- Alignment − YAGI Shuzo
  2020　八木酒造に残る品々
  2020　Objects at YAGI Sake brewery

特別映像（会場限定公開） Special Video（Limited screening at the exhibition）

『すべ としるべ 2020 #02［残影の残光］ Ver.1』
2020　HD VIDEO（2：59）
監督：正木 裕介 ／ 撮影・編集：麥生田 兵吾 ／ パフォーマンス：今村 達紀
“Sube/Shirube 2020 #02［afterglow of vestige］Ver.1”
Director：Masaki Yusuke, Film：Mugyuda Hyogo, Performer：Imamura Tatsunori

　友枝望は現地でのリサーチによって場や物事から「相対性や類似性」を発見し、そこに「行為を加える」ことで、鑑賞者に「観察や検証の対象」を提示します。しかし、広島を拠点とする友枝にとって、自粛期間などによりそのリサーチは資料を中心としたものとなり、作品制作は10月末からの長期滞在中に行なわれることになりました。

　枯れた桑、繭づくりをはじめない蚕、想像だけでつくりはじめた桑酒、山中で松茸を探しまわる映像とスーパーで購入した外国産の松茸、季節はずれの鮎に代わって、昔は来客用の便器として使用されていたらしい鉢に泳ぐハヤによって構成された《 **Misalignment** 》は、かつて地域で盛んであった「松茸狩り」や「鮎狩り」、養蚕から転じた「桑酒づくり」の記録をシミュレートしようとしたもの。《 **Ritual** 》は、酒造の竈門の煙突に幾重にもなる御札に新たな一枚を重ねるため、自ら愛宕山にお参りに行った映像。《 **afterglow of vestige** 》は、古い記録写真と同じ場所の現在の様子をフィルムにプリントして重ねるとともに、丹羽杜氏の「酒づくり唄」を「音楽」として、タップダンスによる拍子に分解・再構築したインスタレーション。酒造倉庫に眠っていた大量の品々をひとつひとつ観察・分類・配置しなおした《 **Alignment** 》。

　友枝は酒蔵や地域に残る記録や記憶に、「まねる」「なぞる」「並べなおす」といった行為を加えることで、見るだけ・聞くだけだった情報を自身の体験に転換しました。そして、それらは鑑賞者の眼差しを引き込む対象なって、決して上手いとは言えない鼻唄のように、いつまでも注意を惹きつけます。

正木 裕介（本展企画）

From local research of places and things, Tomoeda Nozomi discovered "relativity and similarity" and "adding actions" to them. The viewer is presented with "objects of observation and verification". However, for Hiroshima-based Tomoeda, the research became centered on materials due to the period of quarantine and the work will be produced during a long stay from the end of October.

“***Misalignment***” is an attempt to simulate the records of "Matsutake mushroom hunting" and "Ayu fishing" that were once popular in the area and sericulture shifting to "Mulberry sake brewing”. This work is composed of wilted mulberries, silkworms that don’t start making cocoons, Mulberry sake that he started making just in his imagination, a video of searching for Matsutake mushrooms in the mountains, foreign Matsutake mushrooms purchased at a supermarket, and, instead of unseasonable Ayu, Minnows swimming in a pot that seems to have been used as a toilet bowl for visitors in the past. “***Ritual***” is a video of a visit to Mt. Atago in order to stack a new note on charms on the sake brewery’s furnace. The work, “***afterglow of vestige***” is an installation of the printing of the overlay of an old documented photo and a current one of the same place on film, along with a TAMBA Toji group’s “Sake Brewing Song” as music that has been disassembled and reconstructed into a tap dance rhythm. “***Alignment***” is the observing, sorting and rearranging of a large number of items that had been asleep in the warehouse, one by one.

By adding actions such as "mimicking", "tracing" and "rearranging" to the records and memories that remain in the sake brewery and the area, Tomoeda transformed information that was only seen and heard into his own experience. And they became objects that draw the viewer's gaze, and like humming that is by no means good.

Masaki Yusuke(Curator)

はがみちこ（アート・メディエーター）
Haga Michiko (Art Mediator)

測りきれなさの測りかた
How to Measure the Immeasurable

冒頭から恐縮だが、私は友枝望というアーティストの仕事をこれまで実際に鑑賞したことがなかった。手元には、2018 年のギャラリー・パルクでの個展「Comparisons」などのカタログがあり、またネット上には友枝自身のオフィシャルページなどで過去作が紹介されているので、それらを参照することで彼がどんな作品を発表してきた作家であるか知った。同一製品で生産国が異なる IKEA のコップ２つを並置させ、色味の差に気づかせる。様々なガラスビンを透明度の違いと高さによって分類し、規則に従って平面上に配置する。どうやら、熱心に「測っている」人らしい。ある事物に対する認識の成り立ち、その認識の域外にある固有物が持つ差異、あるいは差異を無効化する認識作用が立ち上がる感触など。とてもざっくりした印象だが、こうしたものの測りかたを発明することが彼の制作であるとも言えそうだ。

測定をおこなうとき彼は毎回、全体と部分の関係を検証するために、その対象のフレームを定めているだろう。例えば《 Alignment 》シリーズでは、機械式フィルムカメラを分解し、各部品を分類し直して規則的に整列させているが、これは「ヤシカエレクトロ 35」というカメラをフレーム（ひとつの総体）とし、その構成を確認するものである。２つの IKEA のコップ《 Double series 》の場合に測定されるフレームは、こうした商品のグローバル化した大量生産システムそのものであるかもしれない。

こんな風に、文字と画像の限られた情報で、私は友枝望というアーティストの作品像を想像する。私自身の眼が触れることのなかった光景について、カメラアイや他者の眼が触れた痕跡を介して、その距離を越えられないか試みている。しかし、これはおそらく成功しない。彼が測っていた事柄は、頭の中でわかったつもりになれば（認識の範疇に置けば）よいものではなく、実際に視覚化された具体物の提示に相対しなければとらえ損ねるものだっただろうから（というのも私の想像である）。

さて、友枝望の展覧会「残影の残光：afterglow of vestige」で、初めて私は彼の作品を目にすることになったが、率直に言ってこの展示で示されていたのは、対象の「測りきれなさ」についての確認である。彼がこれまで取り組んできた実験室のような疑似科学的な測定方法は、近代の複製技術にもとづく消費社会下での集団的な認識フレームに関しては有効性が高そうだ。だが、400 年を越えるアウラに満ち満ちた八木酒造を対象とするとき、その個別性の総体を俯瞰する視点を獲得することが困難であるゆえ「測定不能」の結果がはじき出されてしまう。今回、「Alignment（配列）」されたのは、八木酒造の倉庫に残された大量の物品だ。酒づくりのための用品と、家庭で用いられていたような用品が混在し、いくら分類・配置されたとしても、長い歴史の中でこれらの物品が残された偶然性や、友枝が分類した際の恣意性、はたまた「こんなものが?」という文脈の意外性などが思考に去来して、いっこうに「八木酒造」というフレームにはたどり着けそうにない。

ただでさえ到達不可能のような対象であるが、加えて、コロナ禍の状況においてディスタンスの保持が必要とされた。地域に足繁く通ってコミュニティに分け入り、当事者性を獲得しながらリサーチをおこない、そこで体感された経験をもとに作品を制作する ─ 2019 年以前にアートの世界でしばしば見られたこの方法論は、やはり 2020 年からは実行が困難となっている。友枝の場合は、遠隔でできる調査として京都・八木について書かれた文献を使用したという。ちょうど私が彼の過去作を調べたように、文字と画像を頼りに対象を理解し「この対象はこのようなもの」と推定した上で、滞在制作をおこなった…。

《 Misalignment 》と名付けられた３つの作品からわかるように、資料をもとに彼が事前に用意したこの土地に関わるテーマ「松茸狩り」「鮎釣り」（行楽地としての史実）、「桑酒」（養蚕の歴史と八木酒造の固有性）のシミュレーションはことごとく上手くいかない。だが失敗の提示は逆説的に、対象と作家の距離そのものを浮かび上がらせている。

空っぽの板間ではタップの音が響く。かつて杜氏集団が歌った「酒づくり唄」に合わせてここで踊られたタップダンスの映像だというが、そのタップからは私にはちっとも原曲の想像がつかない。それでも、連続するタップ打音に還元された拍子に、節まわしの抑揚を聞き取って「唄」を認識しようとがんばる。ここになお残響するものに耳をすまし、測りきれないものの総体（フレーム）をとらえようとする。唄の姿がわずかに立ち上がったような気がしたとき、これが今回の友枝の「測りかた」だったのだと気づかされた。きっとここに来なければ、そうは気づかなかっただろう。

Excuse me for starting like this but I have never actually seen the work of the artist named Tomoeda Nozomi. By referring to the catalog for the “Comparisons” exhibition at Gallery PARC in 2018 at hand as well as the introduction of past work on Tomoeda Nozomi’ s official page on the Internet, I came to know the kind of artist that he was. By placing two IKEA cups, the same product but produced in different countries, side by side, one is made to notice the difference in color. He classifies various glass bottles by difference in transparency and height and places them on a flat surface according to rules. Apparently, he is a person who enthusiastically “measures”. “The mechanism of recognizing something, the differences that a unique object has outside the range of recognition or the feeling that arises from the act of recognition invalidating the differences, etc.” It's a very rough impression but it seems that the invention of measurement methods for such objects is his work.

Every time he makes a measurement, he will define the

target frame to verify the relationship between the whole and the parts. For example, in the “***Alignment***” series, he disassembles a mechanical film camera and although each part is reclassified and aligned regularly, a camera called “Yashica Electro 35” is the frame (one whole) and confirms the configuration. The frame measured in the case of the two IKEA cup “***Double series***” may be the global mass production system itself for these products.

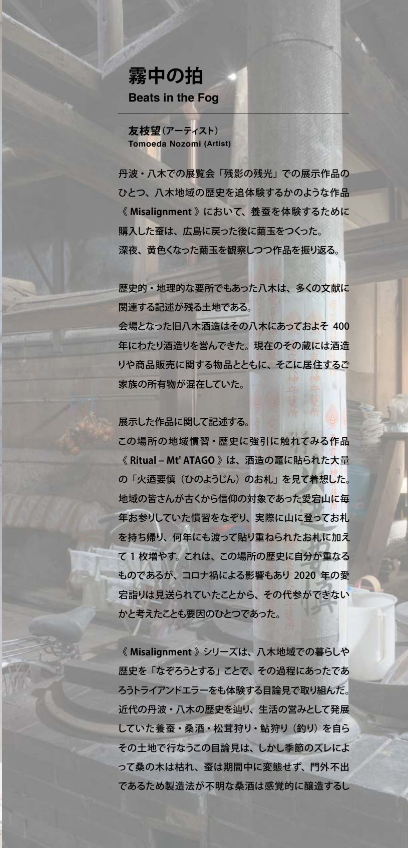
In this way, with limited information in text and images, I imagine the work of the artist named Tomoeda Nozomi. I’ m trying to cross the distance to sights that my own eyes have never touched through tracks touched by the camera eye or the eyes of others. But this probably won’t succeed. Because what he was measuring would not be good if thought to be understood in the head (if put in the category of recognition) and something would be missed if not faced with the presentation of the visualized concrete object (this is what I imagine).

Now, although Tomoeda Nozomi’s exhibition “afterglow of vestige” is the first time that I saw his work, frankly speaking, what was shown in this exhibition was a confirmation of the target's "immeasurableness". The pseudoscientific measurement methods like in laboratories that he has been working on so far seems to be highly effective for public recognition frames based on modern replication techniques. However, when targeting Yagi Sake Brewery, full of aura for over 400 years, the result of "unmeasurable" is thrown out since it is difficult to obtain a bird's-eye view of individuality as a whole. This time, what went through "Alignment" was a large amount of goods left in the warehouse of Yagi Sake Brewery. No matter how much a mixture of products for sake brewing and products that were used at home were classified and arranged, I come to think of the contingency that these items were left behind in the long history, or the arbitrariness of Tomoeda’ s classification, or the unexpectedness of the context of "what is this?", etc. and I don't think that I can reach the frame called "Yagi Sake Brewery".

“Yagi Sake Brewery” already an unreachable objective, in addition it is necessary to maintain distance during the pandemic. One frequently visits a region and joins the community, conducts research independently in the community and creates work based on the experiences there … this methodology, often seen in the art world before 2019, is nevertheless difficult to implement from 2020. In the case of Tomoeda, it is said that he used books about Yagi, Kyoto as a remote survey. Just like how I looked up his past work, after understanding the object by relying on letter/characters and images and presuming that "this object is like this", he created it during his stay.

As understood from the three works named “***Misalignment***”, the simulations of themes related to this land based on data that he prepared in advance, "Matsutake Mushroom Gathering", "Ayu Fishing" (historical facts as a resort) and “Mulberry Sake” (sericulture culture and the uniqueness of Yagi Sake Brewery), do not go well at all. However, the presentation of failure paradoxically highlights the very distance between the subject and the artist.

The sound of taps echo in the empty wooden-floor space. Although one would say a video of the tap dance danced with the “Sake Brewing Song” once sung by a Toji group enters here, I can't imagine the original song from that tap. Even so, I try to recognize the "song" by listening to the intonation of the melody in the beat reduced to continuous tapping sounds. I listen to what still reverberates here and try to capture the whole (frame) of what cannot be measured. When the appearance of the song seemed to have risen slightly, I realized that this was Tomoeda's "measurement method" this time. I'm sure that I wouldn't have noticed if I hadn't reached here.



霧中の拍

Beats in the Fog

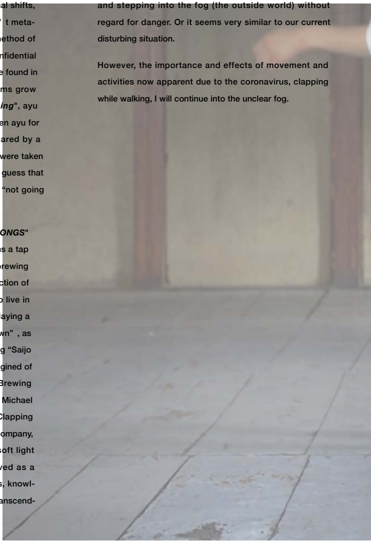
友枝望（アーティスト）
Tomoeda Nozomi (Artist)

丹波・八木での展覧会「残影の残光」での展示作品のひとつ、八木地域の歴史を追体験するかのような作品《 Misalignment 》において、養蚕を体験するために購入した蚕は、広島に戻った後に繭玉をつくった。
深夜、黄色くなった繭玉を観察しつつ作品を振り返る。

歴史的・地理的な要所でもあった八木は、多くの文献に関連する記述が残る土地である。
会場となった旧八木酒造はその八木にあっておよそ 400 年にわたり酒造りを営んできた。現在のその蔵には酒造りや商品販売に関する物品とともに、そこに居住するご家族の所有物が混在していた。

展示した作品に関して記述する。
この場所の地域慣習・歴史に強引に触れてみる作品《 Ritual – Mt' ATAGO 》は、酒造の竈に貼られた大量の「火迺要慎（ひのようじん）のお札」を見て着想した。地域の皆さんが古くから信仰の対象であった愛宕山に毎年お参りしていた慣習をなぞり、実際に山に登ってお札を持ち帰り、何年にも渡って貼り重ねられたお札に加えて 1 枚増やす。これは、この場所の歴史に自分が重なるものであるが、コロナ禍による影響もあり 2020 年の愛宕詣りは見送られていたことから、その代参ができないかと考えたことも要因のひとつであった。

《 Misalignment 》シリーズは、八木地域での暮らしや歴史を「なぞろうとする」ことで、その過程にあったであろうトライアンドエラーをも体験する目論見で取り組んだ。近代の丹波・八木の歴史を辿り、生活の営みとして発展していた養蚕・桑酒・松茸狩り・鮎狩り（釣り）を自らその土地で行なうこの目論見は、しかし季節のズレによって桑の木は枯れ、蚕は期間中に変態せず、門外不出であるため製造法が不明な桑酒は感覚的に醸造するし



かなく、松茸が自生すると伝聞した山には赤松さえも発見できない。《 **Misalignment – Ayu fishing** 》にいたっては、鮎の季節はもうとっくに過ぎて、もはや友釣り用の鮎さえもいない。どうにかして大堰橋の近くで釣りを楽しむ名人から分けてもらったハヤは、蔵に侵入した猫によって拐われてしまった。しかし、このような「上手くいかなさ」を体験・表出できたことはひとつの成功と捉えていいだろう。

《 **afterglow of vestige – TAMBA SAKE BREWING SONGS** 》は、３曲の丹波流酒造り唄を聴きながら、ダンサーにタップダンスを演舞してもらう映像・音響作品である。本来、酒造り唄は集団作業時の “呼吸” を合わせる機能をもつものであるが、酒造りの街・広島西条に暮らす私は、幼少期に学校教育の一環として取り組まされた創作オペラ『白壁の街』では拍子木を奏で、『西条樽踊り』という踊りを舞った記憶があり、「酒造り唄」には踊りと拍子の要素をイメージしていたことが着想の一因である。
また、柔らかな光が差し込む経年美化した板床にはマイケル・ジャクソン『Smooth Criminal』での無重力パフォーマンスや、ベルギーのダンスカンパニー Rosas による『clapping music』（スティーブ・ライヒ）の映像を手がかりとしたことも要因として関わっている。これら私的な記憶や体験、知識や要素が時間や文脈を超えて、ひとつの作品に統合してみたものだ。

スティーヴン・キングの小説『霧』を原作とした SF ホラー映画『ミスト』には、突如として霧に町が覆われ、ストアへ逃げ込んだ人々の” 見えないものへの恐怖” による精神瓦解が描かれている。八木での自身の取り組みは、この中で主人公と少数の仲間がその混沌とした閉所空間から逃避し、危険を顧みず霧の中（外界）へと踏み出すことに似ていると感じる。あるいはそれは現在の不穏な状況とも酷似しているように思える。

しかし、コロナ禍により移動やアクティビティの重要性やその経済効果が顕在化した現在、先の見えない霧の中を散策しながら拍を打ち、進み続けようと思う。

In “***Misalignment***”, one of the exhibited works in the exhibition, “afterglow of vestige”, in Yagi, Tamba, that seems to relive the history of the Yagi area, the silk moths purchased to experience sericulture made cocoon balls after returning to Hiroshima. Then at midnight while observing the yellow cocoon balls, I look back on the work.

Yagi, which was historically and geographically an important point, is a land where a related description remains for many literatures.

The venue for the former Yagi Sake Brewery, which has been brewing sake for about 400 years, is there. Currently in the warehouse, the property of the family living there was mixed in with goods related to sake brewing and product sales.

I’ll describe about the exhibited works.
“***Ritual – Mt’ ATAGO***” , a work that aggressively tries to touch on the local customs and history of this place, was inspired by the large number of "caution fire notes" affixed to the sake brewery’s furnace. Tracing the customs of annual visits to Mt. Atago, the object of worship by everyone in the area since ancient times, one actually climbs the mountain to attain a note to take home and adds it, one more to the stack of charms from over the years. The history of this place overlaps with me but because the 2020 Atago pilgrimage was shelved due to the influence of the pandemic, wondering if I could make a substitute for it is one of the factors of this work.

By "trying to trace" the life and history of the Yagi area, I worked on the “***Misalignment***” series with the idea of experiencing the trial and error that would have been in the process. Following the history of present-day Yagi, Tamba, the plan had been to carry out sericulture, mulberry sake, matsutake mushroom gathering and ayu fishing which have developed as lifestyle activities but due to seasonal shifts, the mulberry trees had wilted, the silk moths didn’ t metamorphose during the period, the manufacturing method of mulberry sake is unknown due to being strictly confidential and even akamatsu (Japanese red pine) couldn’ t be found in the mountain where I heard matsutake mushrooms grow naturally. Especially for "***Misalignment - ayu fishing***", ayu season had already passed, and there weren’ t even ayu for fishing with live decoys at the time. Minnows shared by a master who enjoys fishing at the foot of Oi Bridge, were taken by a cat that broke into the warehouse. However, I guess that being able to experience and express this kind of “not going well” can be thought of as a success.

"***afterglow of vestige - TAMBA SAKE BREWING SONGS***" is a video/acoustic work in which a dancer performs a tap dance while listening to three Tamba-style sake brewing songs. Originally sake brewing songs have the function of matching "breathing" during group work but I who live in Saijo, Hiroshima, a sake brewing city, remember playing a clapping tree in an original opera, “White-Walled Town” , as part of my childhood school curriculum and dancing “Saijo Taruodori”, one of the factors for the idea that I imagined of the elements of dance and rhythm in the “Sake Brewing Song” . In addition, zero-gravity performance with Michael Jackson’ s “Smooth Criminal” and the video of “Clapping Music” (Steve Reich) by Rosas, the Belgian dance company, on the beautifully-aged wooden floor on which soft light shines strongly coming to mind was also involved as a factor. These personal memories and experiences, knowledge and elements are integrated into one work, transcending time and context.

Based on Stephen King’ s novel, “The Mist” , in the sci-fi horror movie, “The Mist” , caused by the "fear of the invisible" when the town is suddenly covered with fog, the mental collapse of the people who escaped to the store is depicted. It woke up thoughts of the time when I wandered in pursuit of matsutake mushrooms in foggy Shiroyama last year. In my own efforts in Yagi, I felt that it was similar to the protagonists escaping from a chaotic closed space and stepping into the fog (the outside world) without regard for danger. Or it seems very similar to our current disturbing situation.

However, the importance and effects of movement and activities now apparent due to the coronavirus, clapping while walking, I will continue into the unclear fog.

記憶をひらく

Opening Memory

展覧会とは、公開された会期だけが「展示」なのだろうか。そもそも展覧会とは、いつから始まり、いつ終わるのか。記憶と記録によっても「展示」は続くのではないか。

ギャラリー・パルクの「すべとしるべ 2020」は、美術作品や展示を「つくる、ひらく、のこす」新たなすべ（方法）を探るプロジェクトである。

通常の作品は展示に向けて作られるが、記録映像を前提に進行するのが本プロジェクトの特徴である。プロジェクトは２期に分かれ、染織のむらたちひろ、インスタレーションの友枝望の２名が会場に滞在、制作により、10～11 月に各３日間の展示をした。一方、写真家の麥生田兵吾が会場内に振付家・ダンサーの今村達紀を招き撮影した記録映像の Ver.1 が会場で公開され、本編となる Ver.2 が会期終了後に発表される。

会場は、京都府南丹市八木町の築400年を超える八木酒造の元酒蔵オーエヤマ・アートサイトである。２階建ての酒蔵建築は外気温の影響を避けるために天井が高く、窓は小さく、冷んやりとした空気が維持される構造になっている。蔵内には各所に酒造りの機器などが置かれ、酒造の痕跡が残る。アーティストはこの場所に何を読み取り、どのような「すべ」で作品を制作したのか。以下では、２つの展示構成や空間、記録の「すべ」について記述してみたい。

むらたは、10 月に「時の容」と題する展示を行った。その「すべ」とは支持体に色が染まる「染色術」である。《時の容》は、天井から吊り下げた白い布の端を濃紺の染料で一度染めて乾かし、再び水につけて色彩が分離する現象を見せる。《雫：Aug. – Oct. 2020, at Yagi / Kyoto》は、八木周辺で撮影した写真をデジタル捺染した布を舟型の形状にし、水を加えて画像を滲ませ、再び色へと還元する。

平田剛志（美術批評）
Hirata Takeshi (Art Critic)

いずれも支持体に染料が移る現象を視覚化した作品だが、写真フィルムを現像液で化学処理して画像が現れる「写真術」を想起する。写真術の現像プロセスは自然科学や光学、化学薬品の使用、温湿度の調整が必要な「技術」である。フィルム写真の現像と定着には多くの水を使い、天候や紙質によって変化が生じる点は酒造りと染色にも共通する。だが、写真が鮮明な画像を現象するのに対し、むらたの染色は場所の時間や記憶、空気など揺動的な出来事を記録、定着する「容れ物」なのだ。

一方、友枝のすべは「真似る」ことである。これまで友枝は、既製品のカメラなどを分解、分類、配置し、微かな類似や差異を知覚させるインスタレーションを発表してきた。11月の展示「残影の残光」では資料のリサーチを経て、養蚕業から生まれた桑酒造り、八木地域のレジャーで盛んだった「松茸狩り」や「鮎狩り」など地域の慣習の再現、模倣を試みた。また、丹波杜氏が酒造工程で歌ったという「酒づくり唄」をタップダンサーのタップで再現した映像によるインスタレーション作品《 **afterglow of vestige – TAMBA SAKE BREWING SONGS** 》を制作し、かつて酒蔵に響いていた音楽を再び甦らせた。

だが、これら友枝のアプローチは当初の目論見とは異なった。桑は枯れ、育てた蚕は繭を作らず、松茸は見つからず、鮎狩りの季節は過ぎていた。よそ者のアーティストはかつてあった慣習や技術、伝統を模倣し、それが叶わない風土の現在を浮き上がらせた。

こうした変容は、２人がともに素材に選んだ窓ガラスと写真を組み合わせた作品に顕著に見られる。むらたは《 **雫：Aug. – Oct. 2020, at Yagi / Kyoto** 》で写真をプリントした「舟」を置く什器に窓ガラスを使用した。外部へ通じる開口である窓の上に浮かぶ舟は、酒蔵から遠くの世界に向けて旅する姿に見える。

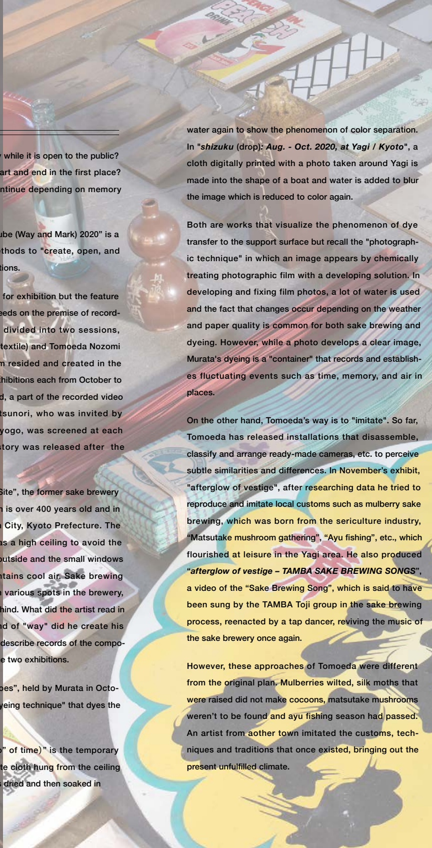
友枝は倉庫に残る八木の古写真と同じ場所を撮影した現在の写真を窓ガラス越しに重ね合わせた《 **afterglow of vestige - TAMBA YAGI** 》に窓を用いた。二重に重なる新旧の写真はきわめて見えにくいが、その見え難さこそ、この場所が積み重ねてきた時間や記憶を示しているようだった。

また、時おり床に差し込む窓枠の光のフレームは、床にスポットを当てるように、何もない空間を明るく照らし出す。その秋の光の現象は作品の一部のように、空間に存在した。

３日間の展示期間中、空間と作品は相互に影響を与え、変化した。鑑賞者が見た作品は、その一部でしかない。こうした展示を記録するには、映像が「すべ」として有効だろう。なぜなら映像は時間や動き、場の気配を捉えることに向いているからだ。本展の記録映像に振付家・ダンサーが参加したのも身体の動きが空間と作品をつなげる「すべ」になるからだろう。

映像では場所や時間に縛られず展覧会を体験できる。だが、映像によるバーチャルな展覧会鑑賞とは、電子的、仮想的、擬似的な体験を意味しない。そもそも「バーチャル（virtual）」とは「物質を介さない作用、事実上同じ機能、効果」を意味し、デジタルと同一ではないからだ。

では、展示を見ることの本質とは何なのか。鑑賞者はむらたの染色の行方や友枝の模倣行為の果てに現れる結果に、潜在的で仮想的（バーチャル）なイメージの可能性を見ていたのではないか。もちろん展覧会を酒蔵と映像で見ることは同一の体験ではない。だが、芸術作品に潜在するイメージを期待し、想像し、回想することに会場と映像の違いはないのかもしれない。記録映像や記録集を通じて人は何を「見る」だろうか。まだ展覧会は続いている。



Does an exhibition exist only while it is open to the public? When does an exhibition start and end in the first place? Doesn't the "exhibition" continue depending on memory and records?

Gallery PARC's “Sube / Shirube (Way and Mark) 2020” is a project to explore new methods to "create, open, and record" art works and exhibitions.

Normally works are created for exhibition but the feature of this project is that it proceeds on the premise of recorded images. The project is divided into two sessions, Murata Chihiro(dyeing and textile) and Tomoeda Nozomi (installation), both of whom resided and created in the venue and held three-day exhibitions each from October to November. On the otherhand, a part of the recorded video of performer Imamura Tatsunori, who was invited by photographer Mugyuda Hyogo, was screened at each session and the original story was released after the sessions.

The venue is “O-eyama Art Site”, the former sake brewery of Yagi Sake Brewery which is over 400 years old and in the town of Yagi in Nantan City, Kyoto Prefecture. The two-story sake brewery has a high ceiling to avoid the effects of the temperature outside and the small windows have a structure that maintains cool air. Sake brewing equipment, etc. is placed in various spots in the brewery, the traces of brewing left behind. What did the artist read in this place and by what kind of "way" did he create his work? Below, I would like to describe records of the composition, space and "way" of the two exhibitions.

In the exhibition, “while it goes”, held by Murata in October, the "sube (way)" is a "dyeing technique" that dyes the support.

The work, “*toki no yo*（“yo” of time)” is the temporary dyeing of the edge of a white cloth hung from the ceiling with a dark blue dye which is dried and then soaked in water again to show the phenomenon of color separation. In "*shizuku* (drop)*: Aug. - Oct. 2020, at Yagi / Kyoto*", a cloth digitally printed with a photo taken around Yagi is made into the shape of a boat and water is added to blur the image which is reduced to color again.

Both are works that visualize the phenomenon of dye transfer to the support surface but recall the "photographic technique" in which an image appears by chemically treating photographic film with a developing solution. In developing and fixing film photos, a lot of water is used and the fact that changes occur depending on the weather and paper quality is common for both sake brewing and dyeing. However, while a photo develops a clear image, Murata's dyeing is a "container" that records and establishes fluctuating events such as time, memory, and air in places.

On the other hand, Tomoeda’s way is to "imitate". So far, Tomoeda has released installations that disassemble, classify and arrange ready-made cameras, etc. to perceive subtle similarities and differences. In November’s exhibit, "afterglow of vestige", after researching data he tried to reproduce and imitate local customs such as mulberry sake brewing, which was born from the sericulture industry, “Matsutake mushroom gathering”, “Ayu fishing”, etc., which flourished at leisure in the Yagi area. He also produced “*afterglow of vestige – TAMBA SAKE BREWING SONGS*”, a video of the “Sake Brewing Song”, which is said to have been sung by the TAMBA Toji group in the sake brewing process, reenacted by a tap dancer, reviving the music of the sake brewery once again.

However, these approaches of Tomoeda were different from the original plan. Mulberries wilted, silk moths that were raised did not make cocoons, matsutake mushrooms weren’t to be found and ayu fishing season had passed. An artist from aother town imitated the customs, techniques and traditions that once existed, bringing out the present unfulfilled climate.

These transformations are notable in works of the combination of window glass and photographs that the two both chose for materials. With "*shizuku* (drop)*: Aug. – Oct. 2020, at Yagi / Kyoto*", Murata used window glass for the utensil on which the "boat" with the printed photos was placed. The boat floating above the window, which is an opening leading to the outside, looks like it' s traveling to a distant world from the sake warehouse.

For "*afterglow of vestige – TAMBA YAGI*" , Tomoeda used a window between an old photo of Yagi remaining in the warehouse and a current photo taken at the same place. The overlapping of old and new photos are extremely difficult to see but that difficulty (of seeing) is what seemed to show the times and memories that this place had accumulated.

In addition, the frames of light that occasionally stream in through the windows brightly illuminate the empty space,as if highlighting the floor. That phenomenon of autumn light existed in the space like a part of the work.

During the three-day exhibition period, the space and the work were mutually influenced and changed. What the viewer saw is only a part of the work. The video will be effective as a "way" to record such exhibitions because it is suitable for capturing the time, movement and sense of a place. The participation of the performer in the recorded video of this exhibition is probably to show that the movement of the body can be a "sube (way)" that connects the space and work as well.

With the video you can experience the exhibition regardless of location or time. However, a virtual exhibition by video does not mean an electronic, virtual or simulated experience. In the first place, "virtual" means "actions that do not involve substances, virtually the same functions and effects," and is not the same as digital.

So what is the essence of seeing an exhibition? Perhaps the beholder might have seen the potential of latent, virtual images from the end result of the whereabouts of Murata's dyeing and Tomoeda's act of imitating? Of course, watching an exhibition in a sake brewery and watching it in a video is not the same experience. However, there may be no difference between venue and video in expecting, imagining and recollecting the latent image of artwork.

What do people "see" through recorded videos and materials? The exhibition still continues.

すべ と しるべ 映像について

About the videos of "Sube / Shirube"

『すべ と しるべ』は、写真・テキスト・映像により展覧会を記録するとともに、機能や特性の異なる記録が鑑賞者自身の「想像や発見」によって横断的に繋げられることを目的としています。

記録によって展覧会を再現（再生）しようとするのではなく、記録をもとに鑑賞者の想像や発見という「体験」を促し、そこに異なる「鑑賞体験」をつくり出すこと。これにより場所と時間、技術やメディアに依拠することなく、「展覧会 = 体験」の機会へのアクセシビリティを確保していけると考えます。

下記のリンク先で「#01 むらたちひろ：時の容」、「#02 友枝望：残影の残光」の2つの展示をもとに制作した映像をオンラインで公開しています。この映像は、パフォーマーに今村達紀（振付家、ダンサー）、映像作家に麥生田兵吾（写真家）、本展企画・正木裕介のディレクションにより制作したもので、いずれも展示や作品・作家の意図を解釈しながら、2名のアーティストによる表現とは独立したものとして制作しています。

時間、音、身体といった情報を多く持つ映像を鑑賞いただくことで、みなさまには写真・テキストなどとあわせた記録の中に、それぞれの作品や展覧会を発見いただけるのではないでしょうか。

Along with recording exhibitions by photos, texts and videos, "Sube / Shirube" aims to connect records with different functions and characteristics across the board through the viewer's own "imagination and discovery."

Rather than trying to reproduce (replay) the exhibition by the records, the "experience" of the viewer's imagination and discovery based on the record is promoted, creating a different "viewing experience" there. By doing so, we think that accessibility to the opportunity of "exhibition = experience" can be ensured without relying on location, time, technology or media.

At the link below, the videos produced based on the two exhibitions, "#01 Murata Chihiro : while it goes" and "#02 Tomoeda Nozomi : afterglow of vestige" have been released online. These videos, planned and produced under the direction of Masaki Yusuke with Imamura Tatsunori (choreographer, dancer) as performer and Mugyuda Hyogo (photographer) as videographer, were produced with the expressions by the two artists being independent while interpreting both exhibitions and works and the intentions of the artists.

By viewing videos with a lot of elements such as time, sound and physical sensation, you will be able to discover each work and exhibition in the combined records of photos, texts, etc.

ギャラリー・パルク HP（http://www.galleryparc.com）内
『すべ と しるべ』特設サイトへ
映像には「すべ と しるべ」の Facebook（subeshirube）、Instagram（sube_shirube）からもアクセスいただけます。

Go to the "Sube / Shirube" special site on the Gallery Parc website. The videos can also be accessed through Facebook and Instagram of "Sube / Shirube".

すべ と しるべ 2020 Sube / Shirube 2020

企画・構成 Curator
正木裕介（ギャラリー・パルク） Masaki Yusuke(Gallery PARC)

主催・制作 Organize / Produce
グランマーブル ギャラリー・パルク Gallery PARC [GRAND MARBLE]

助成 Grant
京都府文化力チャレンジ補助事業
Kyoto Prefecture Culture Challenge Support Scheme

【 展覧会 Exhibition 】

#01
時の容 while it goes
むらたちひろ Murata Chihiro

2020 年 10 月 24 日［土］・25 日［日］・26 日［月］ 12〜17 時
October 24 (Sat), 25 (Sun), 26 (Mon), 2020, 12:00 p.m ~ 5:00 p.m

オーエヤマ・アートサイト O-eyama Art Site
629-0141 京都府南丹市八木町八木鹿草 71「八木酒造」内

協力 Cooperation
江島和臣 Eshima Kazuomi ／ **武田真彦** Takeda Masahiko
オーエヤマ・アートサイト O-eyama Art Site［会場提供］
今村達紀 Imamura Tatsunori

#02
残影の残光 afterglow of vestige
友枝望 Tomoeda Nozomi

2020 年 11 月 14 日［土］・15 日［日］・16 日［月］ 12〜17 時
November 14 (Sat), 15 (Sun), 16 (Mon), 2020, 12:00 p.m ~ 5:00 p.m

オーエヤマ・アートサイト O-eyama Art Site
629-0141 京都府南丹市八木町八木鹿草 71「八木酒造」内

協力 Cooperation
米沢直（タップダンス） Yonezawa Naoshi(tap dance) ／ **大堰川の釣り人** Oigawa River Angler ／ **黒田大地** Kuroda Daichi ／ **JUJU スタッフの皆様** JUJU's stuff ／ **秋田家の皆様** Akita family
オーエヤマ・アートサイト O-eyama Art Site［会場提供］
今村達紀 Imamura Tatsunori

会場記録（写真・映像）Photo, Movie
麥生田兵吾 Mugyuda Hyogo

展示補助 Assistance
肥後亮祐 Higo Ryousuke

【 映像 Video 】

監督 Director
正木裕介 Masaki Yusuke

映像作家 Video Artist
麥生田兵吾 Mugyuda Hyogo

パフォーマー Performer
今村達紀 Imamura Tatsunori

音楽 Sound
むらたちひろ Murata Chihiro ／ **友枝望** Tomoeda Nozomi

【 図録 Catalogue 】

編集 Editing
ギャラリー・パルク（高坂玲子、村田ちひろ） Gallery PARC（Kousaka Reiko,Murata Chihiro）

執筆 Text
勝冶真美 Katsuya Mami ／ **友枝望** Tomoeda Nozomi ／
はがみちこ Haga Michiko ／ **平田剛志** Hirata Takeshi ／
むらたちひろ Murata Chihiro ／ **正木裕介** Masaki Yusuke

写真 Photo
麥生田兵吾 Mugyuda Hyogo

写真提供 Photo Courtesy
Mou（○）／ **むらたちひろ** Murata Chihiro （□）／
友枝望 Tomoeda Nozomi （△）

翻訳 Translations
岡本佐知子 Okamoto Sachiko ／ **河合良成** Kawai Yoshinari ／
ダラ ハン Han Dara

協力 Cooperation
分林寛奈子 Wakebayashi Kanako

デザイン Design
正木裕介 Masaki Yusuke

印刷 Printing
株式会社グラフィック GRAPHIC Corporation

発行 Publisher
グランマーブル ギャラリー・パルク Gallery PARC [GRAND MARBLE]

発行日 Published
2021年2月12日 February, 12, 2021

© 2021 Gallery PARC All rights reserved.

関連ウェブサイト Website
すべ と しるべ 特設サイト
subeshirube sube_shirube

ギャラリー・パルク http://www.galleryparc.com
むらたちひろ https://murata-chihiro.tumblr.com
友枝望 http://www.nozomitomoeda.net